

堅物副社長の容赦ない求愛に 絡めとられそうです

入海月子

Toukiko Irumi



目次

堅物副社長の容赦ない求愛に
絡めとられそうです

後日談 結婚のこと

後日談 三年後のこと

和解の兆し

書き下ろし番外編

堅物副社長の容赦ない求愛に
絡めとられそうです

プロローグ

背中にはひんやりとした床、私にのしかかる体温の高い身体。

私は貴さんに押し倒されていた。

普段はクールで整った顔が、じつと熱く私を見下ろしてくる。

「あかり……」

名前を呼ばれたかと思つたら、ちゅつと湿つたやわらかいものが耳に当たつた。

彼の唇だ。

それに気づき、顔が燃えるように熱くなる。

唇が私の耳から頬に移り、そのくすぐったさに身を引こうとすると、逃がさないとばかりに後頭部を掴まれてキスされた。

そのまま深く強く吸いつかる。

苦しくなつて口を開けると、舌が入り込んできた。

びっくりして身じろぎしようとしたけど、頭と腰に回された手に抱きすくめられて動けない。

貴さんの舌は私の舌を探し当てると絡みついた。そして、また吸いつかる。

「んっ！ うんんっ……」

擦り合わされた舌は気持ちよく、角度を変えて何度も吸われるうちに酸欠のようになつて、ぼんやりしてくる。

そんな私の口を解放した貴さんは、頬に手を当てて見つめてきた。

「あかり、僕は君が欲しい」

「……!?」

突然の言葉に驚いた。

私を切望する瞳に息を呑む。

普段は冷たい彫刻のような彼の顔から男の色気が滴り、明確な欲望が見えた。

第一章

「國見^{くにみ}コーポレーションの國見貴と申しますが、担当の佐々木さんはいらっしゃいます

か？」

彼がうちの会社、田中プランニングを訪れた時、みんな一瞬フリーズした。そして、ザッと私を振り返る。年が明けて仕事始め早々のことだった。

現れたのは、銀縁眼鏡の超美形。ギリシャ彫刻を思わせるような整った造作に少しきせのある黒い前髪が落ちかかり、均整の取れた長身の身体は紺のビンストライプのスリーブに包まれている。

その姿は美麗で、まるで彼の周りにだけ光が差しているよう。とても田舎の零細企業に現れるような人物に見えなかつた。

「佐々木は私です……」

「なんで、私？」と思いつつ、手を挙げて席を立つ。彼は怜俐そうな瞳を私に向けて会釈し、眼鏡のブリッジを押し上げた。

その妙に色氣があるしぐさに、周囲から、ほおつと息を吐く音が聞こえた。

私は佐々木あかり。二十六歳。田中プランニングに勤めて五年目になる。

うちの会社は公的機関からの業務委託をメインにしており、私はここ天立市から委託された地域活性化事業を担当している。具体的に言うと、古民家を利用した宿泊施設やカフェ、地元名産品を売るショッピングなどの運営、広報の担当だ。

名所らしい名所がない天立市に観光客を呼び込もうとホームページを整えたり、SNSでショッップのアピールをしたりと日々努力している。だけど、田舎すぎて残念ながら成果は芳しくない。天がついている地名なだけに星空は綺麗なんだけどね。

市の予算を使って古民家の整備をしているのに、結果が出ないのは非常にまずい状態だ。

もうすぐ宿泊施設もオープンできそうなのに。

「國見副社長、行き違つたようで、すみません！ 急なことでまだ佐々木には話していません……」

田中社長がそう言いながら、大慌てで走りこんできた。

社長は七三分けの髪、柔和な顔、安定感ばっかりの体形を備えたバイタリティあふれる人だ。今日は市役所の担当に呼ばれて打ち合わせに行つていたはずだった。

なんのことかわからず、社長とイケメンとを交互に見ると、その美形はこれ見よがしに溜め息をついた。

9 堅物副社長の容赦ない求愛に絡めとられそうです

東京まで三時間はかかるので、夕方まで戻りたいなら、確かに時間はないけど。

社長はペコペコしながら、ドアを指した。

「とりあえず、会議室へどうぞ。芝さん、お茶をお願い」

事務の芝さんに声をかけると、社長は國見副社長という人を会議室へ案内した。私を手招いて。

二人を追つて会議室に行つたら、美形に紹介された。

「國見副社長。改めまして、田中プランニング社長の田中博です。こちらが担当させていただく佐々木あかりです。若いですが、よく気の利く優秀な社員です。なんでもお申しつけください」

社長が私に下駄をはかせるような紹介をすると、國見副社長は切れ長の涼しげな目を私に向けた。

「佐々木あかりと申します。よろしくお願ひいたします」

「國見コーポレーションの國見貴です」

名刺を出した私に、彼も名刺を差し出し名乗った。その爪先は整つていて、指でさえも纖細で美しい。

（國見コーポレーション？）

先ほどは國見副社長のあまりの美形ぶりに気を取られて聞き流していたけど、國見コーポレーションといえば、テレビCMを打つほどの都市開発企業最大手だ。そんな社名を聞いて、びっくりする。

妙に耳に残るCMのフレーズが脳内で再生される。
「あなたに夢と^{ひと言}癒しを。國見コーポレーション」
あの國見コーポレーションなの!?

しげしげと名刺を見てしまう。

「急なことで申し訳ありませんが、よろしくお願ひします」

丁寧にそう付け加えられ、大企業の副社長の割にえらそうじゃないことを意外に思つた。

（肩書きだけで人を見てはいけないわよね）

そう思つたのに、打ち合わせに入つてすぐに前言を撤回したくなつた。

席につき、お茶が出されると、田中社長は話し始めた。

「國見コーポレーションさんでここ一帯をリゾート開発する計画があるそなんだ。そこで、國見副社長が事前調査されることになつてね。その間の窓口担当を佐々木さんにやつてもらおうと思つてるんだ」

(ええーーー！ なんで私!?)

びっくりして目を見開く私をクールに見つめた國見副社長は、田中社長に視線を移した。

「佐々木さんは驚かれているようですね。先ほどおっしゃっていましたがかなりお若く見えます。失礼ですが、御社にはベランの方もいらっしゃるのに、なぜ佐々木さんが担当なんでしょうか」

下っ端の若い女が担当なんて大丈夫かとほのめかされたようで、カチンとくる。働き始めて五年目というのは経験が浅いと思われるかもしねいけど、入社以来携わっている天立市の地域活性化事業については私が誰よりも詳しいと自負している。別にこの人の担当になりたいわけじゃないけど。

言い返そうとしたら、社長が先んじて反論してくれた。

「佐々木さんは長くこの天立市の観光振興事業を担当していく、よく調べているから責任なんですよ。それに古民家も彼女の担当ですし」

「確かに古民家も担当していますが……なにかに使われるんですか？」

わざわざ出された言葉が気になつて口を挟むと、社長がこちらに目を向けた。國見副社長も補足してくれる。

「國見副社長はここに滞在中、古民家に泊まりたいそなんだ」

「適当なビジネスホテルもないようですし、せっかくなら、実際に開発予定の古民家に宿泊したいと思ったのです。お手数をおかけしますが」

「ちょうど一つ宿泊施設が完成しただろ？ そこを國見副社長に使ってもらおうかと思つてるんだ」

「でも、しばらく滞在されるには電化製品やリネンなどが揃つていません。清掃も入れないといけないですしつ……」

「至急やつてくれ。國見副社長は来週から来られるそだから」「来週、からですか……？」

急な話すぎて不満を言いたくなつたけど、観察するように私を見ている國見副社長に気づき、慌てて表情を取りつくろつた。

「承知しました。来週からですね。ご用意いたします」

「お願いします」

「いえ、こちらこそ、よろしくお願ひいたします」

懲り^{いんぎん}に頭を下げた國見副社長に、こちらも頭を下げ返した。

今日のところは本当に顔合わせに来ただけのようだつた。彼はそのあと軽く来週からの段取りを話すと、打ち合せがあると言つて、さつさと東京に帰つていつた。



「社長へ、どういうことですか！」

國見副社長が帰ったあと、執務室に戻ってきた私は社長に詰め寄った。

「ご、ごめん！ でも、僕だって寝耳に水だったんだよ。観光課の担当に呼ばれて行つたら、いきなり市長室に通されてリゾート開発の話をされたんだ。國見社長から市長に直々に要請があつたらしくて、絶対逃すなって言われるし、そこに國見副社長が現れて、紹介されて……。でも、うちとしても國見コーポレーションと提携できるなんておしいい話だろう？」

うまくいつたら、國見コーポレーションと一緒にリゾート開発に携わることになるそ

うだ。天立市としては絶対成約させたいだろうし、社長が言うのも確かにわかる。

「あの大企業が開発に携わるなら、観光客がわんさか来てお金を落としてくれて、うちの施設はウハウハですね！」

「ウハウハって、君ね……」

社長は私の直接的な表現が気に入らなかつたみたいで、ちょっとあきれたような顔をしたけど、問題はそこじゃない。

私の勢いにたじたじになつた社長は早口で弁解した。

「さつきも言つたように、國見副社長は古民家に泊まりたいそんなんだ。宿泊施設は君の担当だろ？ それには若いから、君がつきつきでアピールしまくつたらうまくいくかな」と思つて。市の担当も賛成してくれたし、國見副社長もさー、こんなむさいおじさんじやなくて、君みたいに若くてかわいい女の子が担当のほうがいいと思うんだよねー！」

周りを見渡して社員の面々を指すと、むさいおじさんと言われた先輩たちが苦笑した。だからといって、そんな理由で担当にされるのは腹立たしい。

「社長、それセクハラです」

かけられている間に彼がここに来ちゃつたんだよ。会社としても、この話が流れるところ
すいんだ。来年の予算が減らされたら死活問題だし」

「……実際、佐々木さんが一番こここの観光事業や古民家に詳しいし、熱意もガツツもあるし……少しでも可能性を高めたいんだよ。いいだろ？」

私は溜め息をついた。

(大企業の副社長が、私ごときに惹かれるはずないとと思うけど)

私は色っぽいタイプでも美人でもない。額までストレートボブに、いたって普通の顔だ。強いて言うなら、ちょっと大きめの目が特徴的かなという程度。

それにそもそも男性には興味がない私はハーデルが高い話だ。

それでも古民家の担当であることに違はないので、じとっとした目で見つめたまま、私はしようがないとうなずいた。

それでも古民家の担当であることに違はないので、じとっとした目で見つめたまま、私はしようがないとうなずいた。

副社長は國見コーポレーションの御曹司。三ヶ月の間、天立市最大のアピールポイントである築百年を超える古民家群の一つに泊まり、市内を視察した上で、開発の適不適を判断するらしい。

私の役目は彼を要所に案内して、売り込んでいくことだ。

(むちやくちや責任重大じゃない!)

市長案件というのもプレッシャーだ。

古民家を改修した宿泊施設はできたばかりで、まだ稼働していない。でも、実際に泊まつてもらえたら、良さをアピールできるはず。

今、稼働している古民家は、見学するだけのもの、お土産物屋になつてているもの、カフェになつているもの、郷土料理レストランになつてているものだ。

他にも温泉地や渓谷など、見どころはそれなりにある。

そこに案内すればいいのかしら？

にこりともしなかつた國見副社長を思い出して、ちょっと憂鬱になつた。

反対に社長がにこやかにはっぱをかけてくる。

「よし、君がプロジェクトリーダーだ。全力でサポートするから絶対に逃すな！ なにがあつてもリゾート開発を勝ち取るぞ！」

プロジェクトリーダーなんて、私一人しかいないチームなのに調子のいいことを言つて……

(まあ、やるからには頑張りますけど)

溜め息をついたあと、頭を切り替えた。

まずは来週に迫った國見副社長の来訪までに、古民家を整えなくてはならない。

私は急いで清掃業者の手配に、水道、電気、ガスの開始手続きをして、すぐに生活で

きるよう準備をした。

もともと宿泊施設として作っているから、照明、空調、机やベッドなどの家具はあつたけど、生活を想定した家電はまだなかつたので、慌てて追加した。調理道具や食材、日用雑貨も揃え、すべての準備が終わつたのは、副社長が来る前日だつた。

「これだけ用意したら十分よね？」

母と二人暮らしで、昔から家事をしていたから、必要なものはわかっているつもりだ。近々家を出たいと思っていたので、それらの手配は一人暮らしの予行練習みたいだつた。

古民家を最終チェックして、満足してうなづく。

それが、あんな展開になるとは、夢にも思つていなかつた。



「それでは、これから三ヶ月間よろしくお願ひします」

銀縁眼鏡をキラリと光らせた國見副社長は、相変わらずの美形ぶりで私に挨拶あいさつをした。

私たちとは会議室で打ち合わせを始めるところだつた。

「こちらこそ、よろしくお願ひいたします。改めまして、このたびは天立市に興味を持つていただきありがとうございます。早速ですが、当市のご説明から……」

私はまずパンフレットを見せてこの地域の特徴を説明しようとした。

「天立市。前年度の調べで人口五万四千三十二人。面積三百三十四キロ平方メートル。一級河川が形づくつた平野部とその源流点となる山間部で構成されており、渓谷や林、滝など、豊かな自然と景観に出会える……。私はそんなホームページにも載つているような話を聞きに来たではありません。もっと実のある内容をお聞かせくださいませんか？」

國見副社長はちらつとパンフレットを見やると、まさにそこに書いてあるような内容をスラスラと暗唱してみせた。

事前調査はばつちりということなのだろうけど、慇懃無礼いんぎんぶれいを絵に描いたような態度にカチンとくる。

私は負けず嫌いなのだ。

空氣。ぜひ天立市で非日常に触れ、心の疲れを癒しませんか?』
彼は私が考えたキャッチコピーをそらんじた。

一字一句合っていて、記憶力がいいのねと感心した私は、続いた言葉に顔を引きつらせた。

「実際に平凡なキャッチコピーですね。どこの田舎でもほぼ通用する。父がこれのどこに惹かれたのか理解に苦しむ……」

彼は後半は独り言のようにつぶやき、私の表情を見て「ああ、失敬」と、眼鏡をくいっと上げた。

（なによ！ そっちからリゾート開発したいって言つてきたんじゃないの！ 副社長は反対派なわけ？）

ムカツとしたものの、『絶対に勝ち取るぞ！』という社長の言葉を思い出して、無理やり笑顔を作つて言つた。

「それでは、國見副社長に天立市の魅力が伝わるように、最大限努力させていただきますね」

私は分厚いファイルの束をドサッと机の上に出した。

少しでも引きになるところはないかと、天立市内を回つて集めた資料だ。

「それは助かります。ご存じの通り、弊社ではここ天立市の大規模リゾート開発を考え

ております。その実現可能性を探りに私が派遣されたわけです。見込みがないのに投資しても仕方ないですからね」
眼鏡のブリッジに人差し指を当てて、冷めた目でこちらを見る國見副社長は、全然乗り気じやないようだ。

そこで、あえて前向きな質問をしてみた。

「見込みがあれば、どういう流れになるんでしょうか？」

「御社と業務提携して、地元の方との調整をしていただきつつ、景観、文化、食などさまざまな観点から人を惹きつける施設を開発します。同時に交通網の整備等も計画しないといけませんね」

「交通網の整備とはすごいですね」

「自家用車ですね。バスの本数が少ないので」

「それは旅行客には致命的じゃありませんか？」

「その通りです」

「来てもらつても、自由に動けないと話になりません。宣伝はそのあとですね」

淡々と告げられて、うなずくことしかできない。

さすが大企業の開発は、うちとはスケールが違うなあ。

相当な額のお金が動くから、慎重にならないといけないってことね。

私は國見副社長にここ良さを伝えるべく、ファイルを開いた。

まずは、最近幸運にも掘り当てた温泉の情報。これはまだ整備中だから、ホームペー

ジには載せていない。

「こちらをご覧ください。近郊に温泉施設を開発中です」

(これは知らないでしょ?)

どうよ? と自慢げにアピールすると、「ふうん。温泉ですか。まあ、ないよりましですね」とのたまつた。

(くく、うちの貴重な観光資源をないよりましって! 腹が立つわ、この人) でも、怒るわけにはいかない。

私は写真や資料を見せながら、観光資源の紹介を続けた。

渓谷を流れ落ちる川、名水、それを使ったおいしい日本酒に料理。星降る夜空、そしてなにより、大正時代の町並みが残る古民家群。にこやかに説明をしながら、そういうえばまだ、この人の笑顔を一度も見ていないことに気がついた。私が熱くこの市の魅力を語る間も含め、硬い表情を崩さない。

(愛想笑いぐらすればいいのに!)

話はちゃんと聞いて相槌(あいづち)を打つてくれるものの、表情が動かない整った顔を睨みつけたくなつた。



「こちらが國見副社長に滞在していただく古民家です。生活できるよう整えてありますが、なにかございましたらお申しつけください」

私たちには彼が宿泊する予定の古民家の前まで来ていた。

ホームページに載っていない情報をざざと話したあと、説明ばかりするより見てもらつたほうが早いと、現地を案内したのだ。いろいろ説明してみて感じたのは、國見副社長はすごく眞面目だということ。堅物と言つてもいいかもしれない。

事前にしっかりと調べてきていて、次々と鋭い質問をしてきた。

「古民家だとそれほど大きないので収容人数が限られますよね?」

「一棟あたり最大十名です。宿泊できる古民家は六棟あり、國見副社長に泊まつていたらものの他の整備中です」

「それをどう運営するおつもりですか？」

「基本は一棟貸しで考えております。それぞれ台所がありますが、食事は近くの食堂で作つたものをお出しする予定です。稼働後は一番端の古民家にスタッフが常駐して、六棟のお客様のお世話をすることになっています」

国面を見せながら、古民家の配置を説明する。

なるほどと眼鏡のブリッジに指を当て、國見副社長はうなずいた。

「客室稼働率をどう見込んでいますか？」

「六割は取りたいと思います。一棟は女性専用にして、一人旅の方も泊まりやすいようにするつもりです」

「それはいいですね。まだ他にも古民家がありましたよね？」

「はい。酒蔵や土産屋などに利用しています」

「こちらは？」

國見副社長は、国面の青い斜線で囲まれた部分を指さした。

「ああ、そのエリアの古民家はまだ市の予算が下りてなくて、整備できていないんです」

「そうですか。じゃあ、宿泊施設を増やす余力が多少あるのですね。まあ、弊社が開発することになれば、この他に大型宿泊施設を建設することになると思いますが」

どんどん降つてくる質問に、緊張しつつも答えていく。

とりあえずは及第点なのかな？ なずいてはくれるもの、気は抜けない。國見副社長はなんていふのか、笑顔がないのと同じで遊びもないのだ。

（疲れないのかなあ。私は疲れる！）

息が詰まつた私は、早々に古民家の中に入ることにした。

古民家は、漆喰の白壁に下見板張りという板チョコを張り合わせたような外観で、石畳の道に沿つて十四棟並んでいる。この一画は、見慣れている私でも趣があると思う。その中のちょうど真ん中に建つ一棟に、格子戸を開けて入る。

広い石張りの土間を上ると、中央に囲炉裏(いわり)がある板張りの部屋が広がっている。床板が冷えている、足裏がジンとした。

空調は完備しているけど、天井が高い古民家は効きが悪い。

一月中旬の今は、冬まつさかり。

外よりひんやりした屋内に、アピールするには一番不利な時期だったなあと思う。

それでも、國見副社長は吹き抜けの天井や、年季の入つた太い梁(はり)を見上げて、「ふ

ん、いいな」とつぶやいた。

（そうでしょ、そうでしょ。ここは素敵なのよ！）

だつた。パンフレットに使いたいと思うほど。

この古民家は見た目だけでなく、ちゃんとバリアフリーにも気を使つていて、土間か

ら上がる一角にスロープをつけている。

そういう点もアピールすると、生真面目な顔で彼はうなずいた。

「この隣は居間になつていて、そこから個室に繋がつています。ここから先はあえてモダンに改装しています」

あくまで宿泊施設にする予定なので、快適さを優先している。トイレも洋式だし、寝るのもベッドだ。

でも、仕切りは板戸や雪見障子にしていて外に目を向ければ日本庭園が見えるし、風情はばつちりだと思うんだよね。

どうだと自慢げに案内していく。

ちらつと彼を見上げると、好感触のようで、自信を強める。

だけど――

「うわあああ！」

突然、國見副社長が大声をあげた。私の背後に回つて、張りつくようにして肩を掴まれる。どきんと心臓が跳ねた。

「な、なんですか!?　どうされたんですか?」

「く、く、く……」

「く?」

笑つているのではなさそうだけど、意味がわからない。

振り返ると近いところに彼の綺麗な顔があり、動搖しているのかカツと目を見開いている。美形はこんな顔も綺麗なんだなあとしみじみ思つていると、彼は震える指で、部屋の隅を指した。

そこには小さな生き物がいた。

「ああ、クモですね」

私は持っていたバイインダーにクモを登らせると、庭に放した。

「き、君は虫が平気なのか?」

「ええ、なんともありません。もしや、怖いんで……」

「そんなわけないだろう!」

食い気味に否定された。

でも、あきらかに逃げて、私の後ろに隠れてましたよね?

よっぽど動搖したのか、少しうるんだ瞳で私を見つめる。

懲り無礼で澄ました彼が取り乱しているのがちよつとかわいく思えた。

「こ、ここには、あんな虫が出るのか?」

「そりやあ、自然に近い土地ですし、そこら中にいますよ」
國見副社長はめまいがするという様子で額に手を当てた。

「やっぱり虫が苦手なん……」

「違う！ ただ、不衛生じやないか！」

「Gのつく虫の対策はしていますよ」

「当たり前だ！」

國見副社長がわめいた。

否定しているけど、どう見ても彼は虫が苦手のようだ。

「あつ、ここにもクモが」

試しにそう言つてみると、國見副社長が飛び上がった。仮想のクモをバインダーに登らせて、窓から放すふりをした。

彼は顔をこわばらせたまま、視線だけでそれを追うと、止めていた息を吐いた。その様子に、老婆心ながら心配になってしまった。

「あのー、國見副社長、ここで一人暮らしできます？」

「バ、バカにするな！ 一人暮らしには慣れている」

「虫が出たらどうします？」

「そもそも虫は外にいるものだろう？ 外なら気にも留めないのだが……」

「現にここにいますよね？」

グッと詰まつた國見副社長はじっと私を見た。

眼鏡のブリッジに指を当て、なにかを考えているようだ。そして、口を開いた時にはもとの冷静な口調に戻っていた。

「佐々木さんはここのお責任者なんですよね？」

「はい」

「家中に出た虫をなんとかするのも責任者の役目じゃないですか？」

「役目ですか？」

「虫が出てるなんて管理に問題があります。責任を取つてもらわなくては」

「言われたことの意味がわからなくて、私は首をひねった。

「そう言われましても、虫なんていつ出るかわからないですよ？ ここに同居でもしない限り、対策しようがないです」

「それなら、そうしてください」

「えっ？」

「もしくは不衛生な場所を提供されたと社に報告し、このお話はなかつたことに……」「いやいやいや、それは困ります！ でも、それなら、御社から他に誰か派遣してもらえば……」

今度は私がかぶせるように言った。

そもそも大会社の現地調査なのに、副社長が単身で来るのがおかしいんだよね。

「それではきかねます」

眼鏡をくいと上げて、國見副社長は言い切った。

「なにか事情がありそうだけど、教えてくれるつもりはないらしい。

必ず勝ち取れと言われているのに、初日で副社長を怒らせて帰してしまって、ま

ずすぎる。私が折れるしかないのかな……

しばし、私たちは黙つて見つめ合つた。

「ああ、女性には不自由しておりませんから、ご安心ください。もちろん、他の方に対応していただくのも構いません」

國見副社長がしつれつと付け加える。

「私は女の魅力があるとは言い難いけど、その言い方はないんじゃない？」

むかむかする。でも、ふと、ここに同居するというのは、私にも好都合だと気づいた。

つい一ヶ月前、私を一人で育ててくれた母が、結婚したいと言つて近藤さんという男性を連れてきた。近藤さんは母の職場の上司で、昔から私たち親子を気にかけてくれた人だ。

父の顔さえ覚えていない私は、優しくしてくれる近藤さんを本当の父親みたいに思つ

ていた。

「彼が早くに奥さんを亡くして以来ずっと独り身だと知つてから、二人が結婚してくれたらいいのにとひそかに願つていた。」

当然、私は諸手を挙げて賛成した。

だからこそ、二人が私に気兼ねしないように家を出なきやと思っていたのだ。

しかし、その話を伝えると、二人は私の一人暮らしにいい顔はしなかつた。私のことを追い出すように感じているみたいだ。

（これは家を出るチャンスじゃない？ 仕事だと言えば、お母さんたちも納得してくれるわ）

國見副社長はさつきまでのうろたえた表情を消し去つて、眼鏡の奥のクールな目で私を見ている。

（この駭黙無礼メガネが私を襲つことはないわよね。それなら、別にいいか。三ヶ月だけだし）

「……仕方ありませんね」

「それでは、引き受けますか？」

「はい、わかりました。ここで虫対策をさせていただきます」

私は覺悟を決めて、うなずいた。

とりあえず報告のために会社に戻ると、國見副社長は田中社長相手にさつきの持論を展開した。

「つまり、佐々木さんと同居したいということですか？」

「いえ、彼女と同居したいのではなく、対策をしていただきたいと言っているのです。虫が出たら、可及的速やかに。それをしていただけるなら、佐々木さんである必要はありません」

國見副社長は眼鏡のブリッジを押さえ、かつこつけて言っている。

（ようは虫が怖いってだけよね）

私はおかしくなって、噴き出しそうになるのをこらえた。

「佐々木さんはいいのか？」

「はい。問題ありません」

はつきり返事をすると、田中社長はこそっと私に耳打ちした。

「でも、独身の女の子なのに外聞が悪くないか？」

「外聞もなにも、私は恋人がいるわけでもないし、結婚する気もないのに大丈夫です。そもそも宿泊施設です。それより、この仕事を勝ち取らないとヤバいんですね？」

「そうなんだよね。でも、本当にいいの？」

「実は私、家を出たかったので、ちょうどいいんです」

「それならいいけど」

につこり笑つて見せると、社長はためらいながらもうなずいた。

家族使用を想定しているけれど、そもそも宿泊施設で個室もあるから、離れた部屋を使えば、最低限のプライバートは確保できる。

ベッドもクローゼットもあるし、服と必需品さえ持つていけば当面は住めるだろう。

室内を整えたのは私だから、設備についてはよく知っていた。
誰かと同居なんて窮屈だなとは思う。しかも、こんな神経質そうな人と。でも、まあなんとかなるだろう。

私の唯一の趣味だけは、ままならないかもしれないけど。

「それでは、佐々木さん、今日からしばらくよろしくお願ひします」
話がついたのを見て、國見副社長はにこりともせず懇懃に頭を下げた。



てきていた。

しばらく家を出ると言うと、驚いた母にあれこれ聞かれた。
服や化粧道具などの必要品をキヤリーバッグに詰めながら答える。

「仕方ないのよ。虫が怖い御曹司の面倒を見ないといけないから」「男の人と住むの!?」

「住むといったって、ホテルの違う部屋に泊まるようなものよ?」

実際は共有部分が多いので距離は近いけど、心配させないようにそう言った。

「それに、こことも近いし。荷物を取りにとか、ちよこちよこ戻つてくるわよ」「そう? でも、気をつけてね。あかりちゃんはかわいいから」

「ふふつ、そんな心配いらぬわよ」

親バカ丸出しの母の言葉に笑つてしまふ。

「笑いごとじやないわよ! カわいい娘なんだから!」

「はいはい」

拗ねたように言う母こそ、娘の目から見てもかわいらしい。
たくさん苦労しただるうにほんわかした雰囲気で、頑張る姿を見たら思わず助けてあげたくなる人だ。

実際、母は近藤さんと出会うまでも彼氏が途切れただことがない。

近藤さんも一生懸命でかわいい母だから惚れたに違いない。

(こんなお母さんを捨てたなんて、お父さんもバカね)

想像上の父に心中で舌を出す。

私が四歳の時、父の本当の奥さんに子どもが生まれて、私たちは捨てられた。

母は手切れ金を持つて、実家があつた天立市に戻つてきた。祖父や祖母はすでに亡くなつていたけど、家はあつたので、私たちはさしてお金に困ることもなく暮らせた。

でも、婚外子というのは田舎ではわかりやすく疎外された。

母のことは大好きだ。けど、既婚者との間に子どもをもうけるとか、男の人がいないうきていけないところとか、私には信じられない。みんなが言うようにふしだらと思つてしまう。人を好きになつたことがない私には、世間のそしりを受けてまで自分の意志を貫くその熱情を理解できない。いや、むしろ理解できるようになんてなりたくないかった。

(まあ、顔はいいけどね……)

國見副社長の整った顔を思い浮かべる。

そりやあ、私だつて綺麗なものは好きだから、目の保養にはなる。でも、イケメンだつて三日もすれば見飽きると思うのよね。

そんな失礼なことを考えながら、荷物を持ち上げた。

「じゃあ、行つてきます！」

「いつてらっしゃい。くれぐれも気をつけてね」

「うん。お母さんは近藤さんとラブラブしててね」

「こらっ」

「あはは」

私は母に手を振ると、車で古民家に向かった。

古民家に着くと、入口に國見副社長が立つていた。
もしかして、家の中は虫がいるかもと思って、入れなかつたのかな?
この寒い中に気の毒なことをした。

「お待たせして、すみません。先に中に入つていただいても良かつたのに」

「いえ、そんなに待つていません」

窓を開けて声をかけると、そつけなく答えてくる。

急いで車を駐車場に停めて荷物を出していたら、彼が手伝つてくれた。

「ありがとうございます」

「荷物があれば手伝うのが普通でしよう」

(もしかして荷物が多いだろうと思つて、待ついてくれたの?)

紳士的な言葉に、感じ悪いと思つていたのを申し訳なく思う。

やり取りの際に触れた國見副社長の手は、氷のように冷たかつた。思つたより長く待たせてしまつたようだ。

古民家の中に入り、「温かいお茶でも淹れましようか?」と気づかつた。

「ああ、それなんですが……」

すると、きまりが悪そうに眉を寄せ、國見副社長が言つた。
「他人が作ったものはあまり……」

「他人が作つたもの?」

つまり、私の淹れたお茶は飲めないと?

「あぜん」として彼を見つめた。

「もしかして、國見副社長は潔癖症なんですか?」

そう指摘すると、彼は眉をひそめた。

「違います！　ただ綺麗好きなだけです！　それから申し訳ありませんが、プライベートまで役職で呼ぶのはやめてくれますか？　息が詰まります」
さすがにこの人も、プライベートは気を緩めたいのね。

本当に息が苦しいとでも言うように、彼は不クタイを緩めた。
そのしぐさは無駄に色っぽい。

(確かに家で仕事をことを思い出したくないよね)

私は素直に呼び方を変えた。

「じゃあ、國見さん」

「名字で呼ばれるのは嫌いです」

「えっと、じゃあ、貴さん？」

「はい。お茶は私が淹れます」

「え、あ、ありがとうございます」

貴さんは私の荷物を居間に下ろすと、すたすたと台所に行き、お湯を沸かし始めた。

念入りにやかんを洗つてから。

私はお茶の葉のありかを教えようと、そのあとに続いた。

「お茶つ葉はここに……」

「ありがとう」

貴さんは私が指した茶筒をさつと取り上げ、手慣れた様子でお茶を淹れる。

「ああ、それから食事も私が作りますから、良かつたら、佐々木さんも食べてください」

「それは助かりますが、別々でも良くないですか？」

「申し訳ありませんが、なるべく料理道具を他人に触られたくないですか？」
(やつぱり潔癖症じやない！)

この調子だと、他にも嫌がることが多そうだ。気を使うなど先が思いやられる。

(それでも、貴さんって料理できるんだ。スペック高いなあ。まあ、他人の作ったものを食べられないなら自分で作るしかないけどね)

私は料理が好きでも嫌いでもない。だから作つてくれるというなら楽でいいけど、接待しないといけない立場なのに、私の分までいいのかなと首を傾げる。

まあ、本人がそれを望んでいるんだからいいか。

あれこれ考え、私はうなずいた。

「わかりました。お願ひしてもいいですか？　でも、結構不便じゃありませんか？　外食もできないでしよう」

副社長で御曹司の貴さんなら、接待だつてありそなのに。そう思つて聞くと、貴さんは首を振つた。

「見えないところで作られたものなら、想像力をシャットダウンすればなんとか大丈夫なんです。目の前で作られると、その料理人の衛生状態から調理器具や設備の清潔さまで気になつて、気持ち悪くなつてしまつて……」

それでも結局は我慢して食べるんですが、と貴さんは言つた。

「ご実家はどうされてたんですか？」

「一人暮らしをするまでは、お手伝いさんが出すものを頭を無にして食べていました」

淡々と告げられた言葉に、難儀な人だなあと思う。

「その理屈で言うと、私が手をしつかり消毒してここで料理をしたら、条件はクリアできませんか？」

ここも清潔さは思う存分調べられますし
ふと思いつきで言うと、思つてもみなかつたのか、貴さんは硬い表情を崩して目を瞬かせた。

「……その考えはありませんでした」

「試してみます？」

「まあ、そのうちに」

お茶を座卓に運ぶと、座布団を出して座る。

床暖房を入れておいたので、だんだん足もとが温かくなつてきた。

貴さんが淹れてくれたお茶は、甘みが出てまるやかでおいしかつた。
淹れ方が上手だわ。

「ああ、そういうえば、私に対して、敬語を使わなくていいですよ？」

「それは有難い。それじゃあ、君も……」

「いいえ。貴さんはお客様ですし、たぶん、年上ですよね？」

「僕は二十九だ」

「私は二十六歳ですから、やっぱり年上ですね。それなのに、言葉を崩すわけにはいきません」

「なら、好きにすればいい」

呼び方を碎けたものにしたいなら、しゃべり方も合わせたほうがいいかなと思つて提案すると、貴さんは早速変えてきた。プライベートでも敬語で話していそうな人だけ、実際は違うみたい。このほうが私も落ち着く。

「ついでだから、ここに住む間のルールを決めよう

「そうですね」

潔癖症のことといい、最初からルールを決めておいたほうがトラブルが少ないだろう。
私がうなづくと、貴さんは条件を挙げ始めた。

「さつきも言ったように、食事は僕が作る。食材も僕のほうで必要なものを買うので、

お構いなく」

今冷蔵庫に入っているのは、私が用意した野菜や肉類だ。ついくせで、セール品の豚肉とかを買ってきちゃつたけど、きっと御曹司様のお口には合わないわ。

私はそれを思い出して苦笑した。

「でも、この辺りで食材を買うとなると、ちょっと離れたところにあるスーパーか商店街の専門店に行くしかないですよ。車じゃないと不便かもしません」

「ネットスーパーは?」

「使ったことはありませんが、生鮮品はここで買ったほうが新鮮かと田舎度合いを舐めてもらっちゃ困る。頼んでから中一日はかかるはず。

貴さんが買い物袋を提げている姿なんて想像できないと思つたら、ネットスーパーを使つてたんだなあ。

「じゃあ、近くに車のディーラーはあるか?」

「まさかスーパーに行くために車を買うつもりですか!?

驚いて貴さんをまじまじと見つめるが、彼は「必要なら買うしかないだろ」と平然と

言う。

「いやいや、せめてレンタカーにしましょう。もしくは、私の軽で良ければ使つてください」

「いいのか?」

「はい、ぜひぜひ」

金銭感覚の違いに顔が引きつる。

でも、貴さんが私の軽自動車に乗つていたらミスマッチだなあ。

彼には高級外車が似合う。

「あと、洗濯も引き受けよう。だから、申し訳ないが掃除は頼みたい」

あー、なるほど、掃除は虫に遭遇する可能性があるもんね。

それはいいけど、洗濯は御免こうむりたい。他人に下着を見られるなんて恥ずかしうなつてしまつた。

「掃除はもちろん引き受けますが、洗濯は結構です」

「遠慮しなくとも……」

「そうか」

私たち話し合い、お風呂掃除は貴さん、ゴミ出しは私……というように役割分担を決めていった。

「私たちは話し合い、お風呂掃除は貴さん、ゴミ出しは私……というように役割分担を

「あと、お互いにプライベートには干渉しないようにしよう。無断で相手の部屋に入らないというのもいるな」

「もちろんです」

貴さんはいつの間にか、ノートに条件を書き出していた。

「思いついたら、また書き足していく」

貴さんは満足げにリストを見ると、ハサミで切り離し、壁に貼つてうなずいた。

「必ず守ってくれ」

えらそうに言われて、カチンとくる。

「そちらこそお願ひしますね！」

貴さんはクールなまなざしで眼鏡をくいっと上げた。



なものを食べるのね」と彼を身近に感じて、ちょっとほつとした。

先に貴さんにお風呂に入つてもらつて、私は居間でテレビをほんやり見ていた。

自宅も和室だったから、床に直接座る生活には馴染みがある。

古民家の木の香りと落ち着いた佇まいに、ただいるだけでゆつたりした気分になつた。まさか、自分で準備してきた古民家宿に自分で泊まることになるとは思つていなかつたけど、良さを知るのにいい方法かもしれない。

（それでも、なんか不思議な感じだなあ。会つたばかりの人とこうして一緒に暮らすことになるなんて）

座卓に両手で頬杖をついて、そう考えていた。

同居の始まりは意外と順調だと思つていたところに――

「うわっ、さ、佐々木さん！ 佐々木さん、来てくれ！」

貴さんの悲鳴のような呼び声がした。

なにごとかと浴室に急ぐ。

「貴さん？ どうしましたか？」

私が扉をトントンと叩くと、ガラツと引き戸が開いて、上半身裸の貴さんが飛び出してきた。

引き締まつた身体に適度に筋肉がついていて、身体までギリシャ彫刻のようだつた。

男の人の裸なんて当然見たことがなかつたけど、しなやかで美しいと思つてしまつた。

しつかり見てしまつたあと、我に返つた私は「きやあ」と悲鳴をあげた。

ボボボッと顔が熱くなる。

そんな私に構わず、貴さんは「あれ！ あれ！」と浴室の隅を指さした。

昼間より少し大きなクモがいた。怖いのか、眼鏡越しの瞳が揺れている。

「はいはい、クモですね。寒いから入つてきちゃうのかも」

私はティッシュで掴んで外に出した。

「手！ 手で!?」

驚愕した様子の貴さんが騒いでいる。

無表情で冷やかな普段の様子と正反対で、ちょっとかわいい。

私は周りを見回し、「もうなにもいないです」と安心させるように言った。

貴さんは同じようく確認し、ほっと息をついた。

そしてすぐに眼鏡のブリッジを指で押し上げ、表情を取りつくろう。

「すまない。それでは、風呂に入つてくる」

「はい。ごゆっくり」

今さら澄ました顔をしてると、私はまた噴き出しそうになつた。

貴さんと交代でお風呂に入る。

檜風呂なので、いい香りに包まれて、リラックスできる。お風呂から上がると、居間にまだ貴さんがいた。

とつぐに自室に戻つていると思つたのに。

水を飲む私を目で追ひながら、彼はなにか言つた。そつだつた。

紺のやわらかそうな絹地のパジャマを着た貴さんは、昼間の姿と違つてゆつたりしているように見えた。あぐらをかいているせいかな。

「ああ、すまないが……」

「なんでしょうか？」

言いくそに声をかけられ、彼の目を見る。

「寝る前に、寝室のチエックをしてもらいたいのだが」

「あー、それはそうですね！」

寝室でまた虫に遭遇したら嫌だよね。

私は納得してうなずいた。

貴さんは立ち上がり私を自室に招く。

彼の部屋に入ると、隅にスツッケースが置いてあつたり、テーブルの上にノートパソコンや書類があつた。自分で整えたので見慣れた部屋のはずなのに、私物が置いてある

と、それだけでもう貴さんの部屋という気がして、ちょっとドキドキする。私は隅々まで確認していく。

「大丈夫。なにもいません」

「そうか、ありがとう」

「それじゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

母以外の人におやすみを言つて寝るなんて慣れなくて、なんだか恥ずかしい。

でも、この儀式は毎日の習慣になつた。



朝起きたら、立派な朝食ができていた。

「お、おはようございます」

トーストに野菜スープ、キノコとベーコンのオムレツにグリーンサラダ。

コーヒーのいい香りも漂つている。

私はいつもトーストにカップスープをつけるか、時間がある時に目玉焼きが加わるくらい。

(女子力半端ない！)

これが当たり前という顔をして座つている貴さんを、まじまじ見つめてしまつた。今日も濃紺のスースイ感を醸し出していて、そのお顔は美しい。

「おはよう。なにか苦手なものがあつたか？」

「いいえ、とてもおいしそうです」

「それなら良かつた。食べよう」

そう言われて、寝起きのまま座卓の前に座つてしまつた。

「いただきます」

手を合わせて、早速オムレツに手を伸ばした。

フォークで割るとトロッと半熟状の卵が出てくる。

なんて上級者のオムレツ！

しかも、塩味のきいたベーコンとまろやかな卵が絡んで、とんでもなくおいしい。

「すごい！ これ、レストランクラスの味ですよ！」

感動した私は興奮して声をあげてしまつた。

貴さんは表情を崩さないまま、眼鏡を上げる。

「大げさだろ」

「……それは良かった」

緩めた。

「不思議だな」

「なにがですか？」

「誰かとこんなふうに食事をしたことなどなかつたと思つて」

「ご実家でも？」

「ああ、基本一人だつたな。たまに父がいる時は、緊張でガチガチになつていた」「そう、ですか……」

「ああ、基本一人だつたな。たまに父がいる時は、緊張でガチガチになつていた」「そう、ですか……」

「家なのに親に緊張するの？ お母様は？」など疑問は湧いたけど、聞いていいものか

わからず、私は口をつぐんだ。

視線をさまよわせると、彼の目の下にクマができているのを発見した。

「昨日、もしかして眠れませんでした？」

やつぱり虫が気になつたんだろうかと心配になつた。

もしくは枕が変わると寝られないたちだとか？ 貴さんは神経質わうだから、ありますなあ。

「いや、それはいつものことだ」

なんてことなさそうに貴さんは答えた。

常態化しているんだ。気の毒に。

私なんて、目を閉じたら三秒で寝られる。

「そうなんですね。古民家ショップにハーブのサシェがあるからお試しになりますか？」

「ハーブか。アロマは試したことがある」

「いまいちでした？」

「そうだな」

うなづく貴さんを見て、私と違つて繊細だなあと思った。

「ところで、今日はどうされますか？」

食後のコーヒーをいただきながら、彼の予定を聞いてみる。返答次第で、私もスケジュールを変えようと思った。昨日聞いておけば良かつたんだけど、あまりの非日常の連続に、すっかり忘れていたのだ。

「午前中はリモート会議があるし、片づけたい仕事もあるから、ここにいる」「じゃあ、午後からこの付近をご案内しましようか？」

「ああ、そうしてくれ」

「承知しました」